

冬に来る山姥・隠岐郡西ノ島町波止 令和3年1月5日

収録・解説・酒井 董美^{たまたま} イラスト・福本 隆男



収録・昭和51年5月8日
語り手 福岡エンさん・明治26年

あらすじ

とんと昔。この奥山からこの里へ雪が降るころ山姥がこつちの旧家の上いうとこへ下つて来よつた。こつちにはまだ昔に糸類がないだけん、その人が麻を作つて、その皮をはいで右の手でちいと裂いて、左の手でテガラをこしらえて、車でよゆをかけて糸をこしらえて、機をこしらえることも習わすらし、魚を釣るテグスをこしらえよつた。何月来ておつても、雪が溶けるやあになつと、姿を消して、山へ逃げてしまいましよつたね。また、明けの年、雪が積もるようになつと、またその山姥は下つて来よつたというこゝとでござんした。

解説

海洋性気候地帯に属するこの地区では、冬でもあまり大雪は積もらない。したがって、「跡隠しの雪」のような昔話にはついで出会うことはなかつたが、雪に関わりを持つ

山姥伝説を聞くことができた。小字名は波止、福岡エンさんは、隠岐の海そのもののような爽やかな明るさをたたえておられた。

山姥といえは「牛方山姥」に出てくる牛方を襲つたり、「天道さん金の鎖」に見られる母親を食い殺し、さらにその子どもまで狙つたりなど、概ね民話の山姥は恐ろしい妖怪的存在が多い。けれども、この離島に伝わる山姥は、優しく親切な存在であることか。里人に機を織ることを教え、また、四方海に囲まれて海の幸に恵まれたこの里に釣糸のテグスの製法を伝授するのである。まるで生産の女神、あるいは漁業の女神とでもいえそうな健康な姿を示しているのではないか。この山姥は雪が降り始めるると里にやつて来て人々に幸せを授け、いつの間にか山に帰つて行くのである。こうして眺めてみると、この山姥は新年になるとどこからともなくやつて来て、人々に年玉を与える「正月つあん」こと、正月神となんとよく似ていることか。そして、この島前地方でのこの神は海のはるけき彼方から西ノ島の三度(みたべ)地

区にまず上陸して、各地区へ出かけることになっている。このことはかつての子どもたちとうたわれていた「正月つあん」歓迎のわらべ歌によって証明される。例えば西ノ島町三度の万田半次郎氏(明治19年生)によると

正月つあん 正月つあん
どこから おいでた
三度の浜から おいでた
徳利に酒入れ
重箱に餅入れ
とつくりとつくりござつた

こんな詞章であつたと教えていただいた。この歌には直接、雪との関わりは見られないものの、雪とは無縁ではない山陰地方に位置する隠岐島の正月の神である。したがって、この男神は雪の降りしきる新年に常世の国から海を渡つて来訪されると考えられるのである。したがって、正月に来臨する正月神と雪のある間、山から来てこの地に滞在する先の山姥とは、実に好一對をなす男女の神ということになる。筆者はこのことに気づき一人秘かに微笑しているのである。

(元島根大学法文学部教授)



https://kanbenosato.com/minwa/kancho_20180703.html